様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ０５７４７・１９Ｋ２０９４３

研究課題名（和文）日本人英語学習者の学習経験と動機づけの変容に関する混合研究法による回顧的調査

研究課題名（英文）Motivation and language learning experience among Japanese EFL learners: A retrospective mixed-method study

研究代表者
青山　拓実（Aoyama, Takumi）

信州大学・学術研究院教育学系・助教

研究者番号：２０８２９４８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本人英語学習者がもつ動機づけの形成・変容の過程について、英語学習経験の分析を通して詳細に分析することを目的とした。調査は英語学習者の動機づけパターンを探索するためのアンケート調査の量的分析と、学習経験を探索するためのインタビュー調査の質的分析を組み合わせて実施した。はじめに行ったアンケート調査では、7つの異なる動機づけパターンを持つ英語学習者グループを特定した。これらのグループ分けに基づいたインタビュー調査の結果、これらの動機づけパターンの形成・変容の過程には、学習者と環境要因の相互作用が影響することが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本人英語学習者の英語学習に対する動機づけについて大学生の過去の学習経験を分析することによって、英語学習開始期から大学までの長期間にわたる変容を捉えることを目指した。その結果、学習者自身の変容だけではなく、周囲の環境や社会的要因との相互作用が起こっていることが明らかとなった。これらの成果は、これまで十分に明らかにされてこなかった長期的な英語学習動機づけの変容を詳細に分析し、その要因を明らかにするとともに、日本の英語教育環境における学習者の動機づけのあり方に示唆を与えるものであり、学習者に対する指導のあり方や支援のあり方を検討するための参考となるものである。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to explore the process of changes in Japanese EFL learners' motivation to learn English, using a mixed-methods approach. In the study, an online survey was conducted first, aiming to capture general characteristics of Japanese university-level EFL learners' motivation. Also, latent profile analysis was performed to explore learner sub-groups that have different motivational characteristics, and seven sub-groups were identified. Subsequently, participants from each sub-group identified in the quantitative study were invited for a follow-up qualitative study. In the qualitative study, participants were asked to share stories of their experiences of learning English in the interview sessions, and the data collected through the interviews were qualitatively analysed. Finally, the results suggested that the fluctuations in Japanese EFL learners' motivation relate with learners' internal factors, social/environmental factors, and their complex interactions.

研究分野：外国語教育，第二言語習得

キーワード：言語学習動機づけ　日本人英語学習者　学習経験　混合研究法　回顧的調査　複雑性理論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

第二言語学習動機づけ研究は，第二言語習得研究の中では個人差要因として扱われ，第二言語学習のプロセスを左右する重要な要因の一つとして 1950 年代以降から研究されている分野である（Dörnyei & Ushioda, 2011）。言語学習動機づけの理論は社会心理学，教育心理学，第二言語習得理論などから成る学際的研究分野であり，これまで多くの理論的枠組みが提唱されてきた。また，第二言語･外国語教育の実践への応用に関しても，英語教育と学習者の動機づけの問題（例．訳読式授業，大学受験による動機づけの減退）は，小学校～大学にかけてすべての学習段階における英語教育の場面で取り上げられる問題のうちの一つとなっている。これらの背景に基づき，これまで日本国内を拠点とする研究者らによって日本人英語学習者を対象とした動機づけ研究が数多く行われてきた。日本人英語学習者を対象とした動機づけ研究には，動機づけの特徴を把握することを目的としたものや，授業実践を通して英語学習者の動機づけを高めることを目的としたもの，さらには英語学習動機づけが減退する要因の解明を目的としたものなど，数多くのテーマについて，異なるアプローチから行われてきたものがある。

また，海外における言語習得動機づけや言語学習者の心理に関する研究領域では，1990 年代後半から 2000 年代前半以降の言語学習動機づけ研究は Complex dynamic systems theory (Larsen-Freeman, 2007)を中心とした，学習者の個人差要因（e.g.，言語学習動機づけ）を可変的で絶えず変容し続け，複合的な要因の相互作用によって状態が変化する概念であるとして捉える立場からの研究が主流となっている。しかし Aoyama (2017, August)による，2005 年～2017 年に出版された日本国内での英語学習動機づけ研究に関連した論文 247 本を対象としたレビューでは，日本人を対象とした英語学習動機づけ研究では，1 回きりの質問紙調査を用いて収集された量的データと，それらの統計的分析のみに基づいた議論がなされており，動機づけが経時的に変化するプロセスや，動機づけと関連要因間の一対一の関係性に着目した研究が多く行われていることが指摘された。すなわち，言語学習動機づけの経時的変化や多岐にわたる要因間の複雑な相互作用といった Complex dynamic systems theory から見た言語学習動機づけの特徴は十分に検討されているとは言えない。また，それらの研究の多くでは平均値を始めとした代表値を基にした議論が多くなされているが，学習者間の言語学習動機づけの個人差は捨象され，本来の第二言語習得の個人差要因という，本来言語学習動機づけ研究が議論すべき側面について十分に検討がなされていない。本研究ではこれらの日本人英語学習者の動機づけに関して明らかにされていない側面に焦点を当て，日本人英語学習者の英語学習に対する動機づけについてより良く解釈することを目的とし，調査を行った。

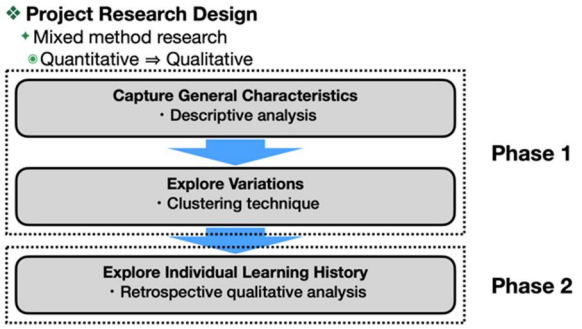
２．研究の目的

上述の通り，日本人英語学習者を対象とした，英語学習に対する動機づけに関する研究は，これまでも数多く行われてきた。しかし，英語学習者のある一時点のみに焦点を当てた研究や，短期間での変容に注目した研究が主なものであり，義務教育課程から高等教育までの長い期間において継続する英語学習の中での動機づけの形成や変容に関する側面は明らかにされていなかった。また，これまで全体の平均値のみに基づいて議論されることが多かった点について，日本人英語学習者の間にも異なる動機づけの特徴をもった学習者がいるという個人差の観点から，学習者間の異なりについて取り入れることが，日本人英語学習者の動機づけプロセスをより良く解釈するために必要である。そのため，本研究は，日本人英語学習者の英語学習開始期から大学生段階までの英語学習に対する動機づけについて，全体の傾向，個人間の差異，さらに長期的なプロセスを明らかにすることを目的とした。以上の議論に基づき，本研究は以下の 4 つのリサーチクエスチョンを設定した。

① 日本人大学生の英語学習に対する動機づけはどのような特徴がみられるか。
② 日本人大学生の英語学習に対する動機づけには，どのようなパターンがみられ，どのようなばらつきがみられるか。
③ 日本人大学生の英語学習に対する動機づけは，これまでの英語学習経験の中でどのように変容したか。
④ 日本人大学生の英語学習に対する動機づけの変容には，英語学習経験に関連したどのような要因が影響を与えているか。

３．研究の方法

本研究は，量的研究と質的研究の組み合わせからなる，2 段階のプロセスで実施した。第 1 段階では，アンケート調査を用いてデータ収集を行い，全体に関する英語学習動機づけの傾向の分析，ならびに異なる特徴を持ったサブグループの抽出を量的に行った。その後，インタビュー調査を通して参加者の大学までの英語学習経験についてのデータを収集し，質的に分析した。このデザインは，Dörnyei (2014)や Chan et al. (2015)が用いた Retrodictive Qualitative Modelling と呼ばれる，複雑性理論の視点から第二言語学習者の変容を捉えるための枠組みを応用している。この枠組みに基づき，大学段階の英語学習者の動機づけの特徴から異なる動機づけパターンを持つサブグループを抽出し，それぞれのサブグループに所属する学習者の英語学習経験と動機づけの変化プロセスをたどることにより，英語学習動機づけの形成や変容に影響を与える要因について検討することを目指した。本研究では，大学生英語学習者の動機づけパターンとサブグループを探索するために潜在プロファイル分析を，英語学習経験の学習者間の異なりと共通性，環境の要因から受ける影響との関係性を検討するため，複線径路等至性アプローチ（サトウ，2009)の枠組みを用いた。それぞれの調査の実施方法に関する詳細は，次節にて結果とともに説明する。

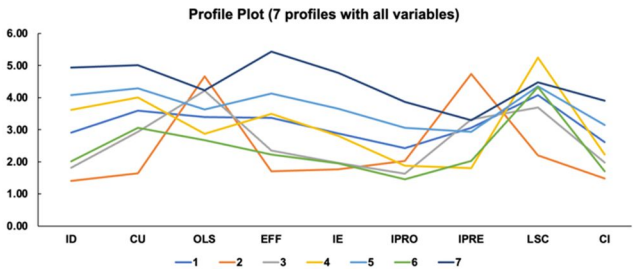


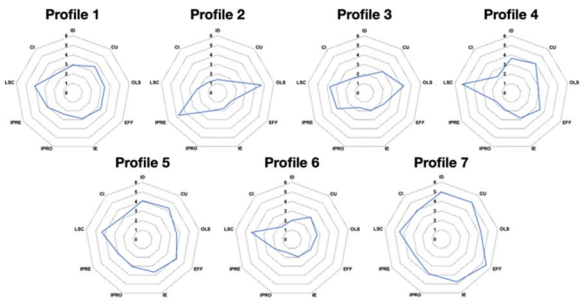
４．研究成果

(1) 第 1 段階：動機づけパターンに関する量的調査

第 1 段階の調査では，アンケート調査により，日本人大学生英語学習者の動機づけ傾向の分析を行った。調査には 216 人の日本人大学生(男性 68 名，女性 148 名，平均年齢 19.13 歳)が参加した。アンケート項目は Taguchi et al. (2009)をはじめとした，第二言語学習に対する動機づけについて尋ねる 9 つの概念（Ideal L2 self，Current L2 self，Ought-to L2 self，Effort in classroom learning，Intended effort，Instrumentality [promotion]，Instrumentality [prevention]，Linguistic self-confidence，Cultural interest）から構成される 46 項目を用いた。アンケート調査は Qualtrics を用いてオンラインで配布・回収を実施した。

データ分析では，はじめに全体の傾向について記述統計量を基に検討した。続いて，動機づけのパターンごとのサブグループを抽出することを目的とし，潜在プロファイル分析 (Latent Profile Analysis: LPA)を行った。従来の研究では，学習者のタイプ分類を行う際はクラスター分析が用いられることが多かったが，モデルに基づいた分類方法である潜在プロファイル分析は，個別の参加者の特徴をより良く反映することができるため，本研究では潜在プロファイル分析を用いた。分析の結果，7 つの異なる傾向をもったサブグループが抽出され，それぞれのグループの傾向についての比較･分析を行った。特徴的なグループとして，Current L2 self のスコアが高く，現在の自分自身の英語運用能力はある程度あると認識しているものの，英語学習に対する強い努力の意思を持たないグループや，Ought-to L2 self のスコアが高い傾向を示し，さらに英語学習に対する努力のスコアが低い傾向を示すグループがみられた。これらに基づき，各グループに属する学習者を対象とした第 2 段階の調査を行った。





(2) 第 2 段階：動機づけの変容と学習経験に関する質的調査

第 2 段階の調査では，第 1 段階の分析結果から得られた 7 つの異なる英語学習に対する動機づけの特徴をもったグループの学習者に対して，過去の英語学習経験に関するインタビュー調査を行い，どのような英語学習経験に関する要因が英語学習に対する動機づけの形成や，英語学習中の動機づけの変容に繋がったのかについての分析を行った。調査には，第 1 段階の調査において継続調査に同意した参加者のうち，15 名の日本人大学生が協力した。データの収集は，各参加者を対象としたインタビューによって行い，英語学習開始時点（就学前や小学校など，参加者によって異なる）からインタビュー実施時点までの英語学習に関する経験と，英語学習に関す

る考え方や取組状況と結びついた動機づけの変容について尋ねた。

収集されたデータは，それぞれのインタビュー対象者の個別の経験から，学習者内の経時的な変容と学習者間のプロセスの異なりに着目し，複線経路等至性アプローチを基にした分析を行った。分析の結果，個別の学習者の変容に影響を与えた共通の出来事として，学校内での定期テストの得点や英語外部試験の結果などのテストが関連した経験や，教師との関係性や授業スタイルが複数の参加者の経験の中にみられた。これらの要因は，過去に日本人英語学習者を対象として行われた動機づけの減退に関する研究（e.g., Kikuchi, 2009)などにおいても指摘されているものであったが，本研究によって得られたデータでは，さらに学習者自身が持つ英語学習に対する価値づけや，英語そのものに対する信念と，学習者の置かれた環境要因である学校での出来事や教師との関わり等の要因の相互作用によって，英語学習者の動機づけが形成されたり，変容したりしていること明らかとなった。また，これらの要因の他に，日本の英語教育制度（e.g., 小学校外国語の授業開始時期や小中の接続）や入試制度など，制度によって学習者が避けることのできない出来事も英語学習に対する動機づけの変容に影響を与えていることが示唆された。

（3）研究の総括

本研究では，日本人英語学習者を対象とし，量的調査による動機づけの特徴の分析ならびに質的調査による英語学習経験と動機づけの経時的な形成・変容プロセスを明らかにした。研究の結果，日本人英語学習者の動機づけには複数のパターンがあり，学習者によって特徴が異なることが示唆されたとともに，動機づけの形成・変容プロセスには学習者内の要因と，学校環境や社会的制度などの学習者外の要因の両面が関与し，それらの相互作用の中で動機づけが変容することが示唆された。これらの研究成果は，長期間にわたる継続的な英語学習の中での日本人英語学習者の動機づけの長期的な変容プロセスをより良く理解することに繋がったと考えられ，日本の英語教育環境におけるより良い指導のあり方や，学習者の支援方法に対して意義のある示唆を与えるものであると考える。しかし，本研究は回顧的なインタビュー調査によって過去の経験を分析したものであり，学習者の印象に残っている出来事や要因への注目が集まっている可能性が研究の限界点として考えられる。今後，各学校段階において長期的に学習者の動機づけの変容を捉えるための縦断的研究を行うことにより，さらに詳細に英語学習者の動機づけについて解釈することが可能になると考える。

<引用文献>

- Chan, L., Dörnyei, Z., & Henry, A. (2015). Learner archetypes and signature dynamics in the language classroom: A retrodictive qualitative modelling approach to studying L2 motivation In Z. Dörnyei, P. MacIntyre, & A. Henry (Eds.), *Motivational dynamics in language learning* (pp. 238-259). Bristol: Multilingual Matters.
- Dörnyei, Z. (2014). Researching complex dynamic systems: ‘Retrodictive qualitative modelling’ in the language classroom. *Language Teaching*, *47*, 80-91. https://doi.org/10.1017/S0261444811000516
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). Harlow, England: Longman Pearson.
- Kikuchi, K. (2009). Student demotivation in Japanese high school English classrooms: Exploring with qualitative research methods. *Language Teaching Research* 13 (4). 453-471.
- Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009). The L2 motivational self system among Japanese, Chinese and Iranian learners of English: A comparative study. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.). *Motivation, Language Identity and the L2 Self* (pp. 66-97). Bristol, England: Multilingual Matters.
- サトウタツヤ (2009). TEM ではじめる質的研究：時間とプロセスを扱う研究をめざして. 誠信書房

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Takumi Aoyama	４．巻 14
２．論文標題 Understanding motivation in the language classroom: Insights from complexity perspectives	５．発行年 2019年
３．雑誌名 島根大学外国語教育センタージャーナル	６．最初と最後の頁 33,43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Takumi Aoyama
２．発表標題 Exploring Japanese returnees' psychological adaptation process and language learning experience: Qualitative trajectory modeling approach
３．学会等名 Inaugural Conference on Language Teaching and Learning: Cognition and Identity 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takumi Aoyama
２．発表標題 Exploring Japanese EFL learners’ motivational profiles: Latent profile analysis of a large-scale survey.
３．学会等名 PLL4 Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Takumi Aoyama
２．発表標題 A qualitative analysis of Japanese EFL learners’ learning trajectories
３．学会等名 The 34th International Conference on Foreign/Second Language Acquisition（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Takumi Aoyama, Takenori Yamamoto	４．発行年 2020年
２．出版社 Multilingual Matters	５．総ページ数 320
３．書名 Richard Sampson and Richard Pinner (eds.) Complexity Perspectives on Researching Language Learner and Teacher Psychology	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関